

<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/stat/data/>

<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/stat/data/fukushima1-mac.csv>

<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/stat/data/fukushima1MP-mac.csv>

貞観地震出典：フリー百科事典『ウィキペディア
(Wikipedia)』

移動：案内，検索

貞観地震

本震

発生日 869年7月9日

(貞観11年5月26日)

規模 マグニチュード (M)8.3 - 8.6

被害

死傷者数 死者約1000人

貞観地震（じょうがんじしん）は、貞観11年5月26日（ユリウス暦869年7月9日[1]、グレゴリオ暦換算7月13日）に陸奥国東方の海底を震源として発生した巨大

地震。地震の規模は少なくともM8.3以上であったと推定されている。現在の地名では、東北地方の東の三陸沖と呼ばれる海域にある太平洋の海底が震源とされ、地震に伴う津波の被害も甚大であったことが知られている。約数十 - 百年ごとに起こる三陸沖地震に含まれるという考えから貞観三陸地震、上述の津波被害の観点から貞観津波ともいわれる。

2011年（平成23年）3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震との類似点が指摘されている [2]。

目次 [非表示]

- 1 概要
- 2 脚注
- 3 関連項目
- 4 外部リンク

概要 [編集] 「陸奥の国で大地震が起きた。稲妻が昼のように光り、人びとは立っていることができなかった。あるものは家の下敷きとなり、あるものは地割れに呑みこまれた。驚いた牛や馬があばれて走り出し、城郭、倉、門櫓や墻壁が無数に崩れた。雷鳴のような海鳴りが聞こえて海嘯が押し寄せ、たちまち海から遠くにあった城下にまで達した。見渡すかぎり水となり、野原も道も大海原となった。舟で逃げたり山に避難することが

できずに千人ほどが溺れ死に、あとにはなにも無くなった」と被害の惨状が『日本三代実録』に記述されている。陸奥国城下は多賀城と推測されており、多賀城市の市川橋遺跡からは濁流で道路が破壊された痕跡も発見されているが、はっきり明記されているわけではないので異説もある。

記録通り仙台平野に津波が溯上した痕跡があるが、この痕跡はこの地震以外にも複数存在することが分かっている。その痕跡から判断した場合、超巨大地震による津波により東北地方の太平洋側が襲われ、その威力で仙台平野が水没するという現象が約1000年間隔で繰り返されているとされる。

津波堆積物調査から岩手県沖 - 福島県沖、または茨城県沖まで震源域が及んだ連動型超巨大地震の可能性が指摘されている[3]。

なお、この地震の5年前の貞観6年（864年）に富士山の貞観大噴火が起きている（「富士山の噴火史」参照）。

脚注 [編集] [ヘルプ]

- 1.^ 宮城県石巻・仙台平野および福島県請戸川河口低地における869年貞観津波の数値シミュレーション（産業技術総合研究所活断層・地震研究センター）
- 2.^ 西暦869年貞観地震に伴う津波の研究（産業技術

総合研究所地質調査総合センター)

3.^ 大阪市立大学、地質工学専門の原口強准教授による。

関連項目 [編集]東北地方太平洋沖地震 - 貞観地震と同様の規模・震源域の地震となった可能性が指摘されている。

巨大地震

地震の年表

三陸沖地震

発生日 869年7月9日

(貞観11年5月26日)

規模 マグニチュード (M)8.3 - 8.6

被害

死傷者数 死者約1000人

西暦869年貞観地震に伴う津波の研究

3月11日に発生した「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」によって大きな被害を受けた宮城県では、過去にも巨大津波が発生していたことが知られていました。

西暦869年の貞観地震と呼ばれる地震は、日本三代実録に記述があり、当時国府があった多賀城（仙台市の北東側）で地震の大きな揺れと巨大津波によって大きな被害があったことが書かれています。特に津波は相当規模が大きかったと考えられ、約40年間隔で発生している宮城県沖地震より更に巨大に地震であったと考えられていました。

この津波が浸水した範囲には津波堆積物（図1）が分布することが東北大学の箕浦教授によって指摘されていましたが、その津波を再現するための調査研究を、産業技術総合研究所が中心になって進めてきました。

まず、陸域の調査によって宮城県から福島県の海岸付近の平野に広く津波堆積物が分布することを、詳細な調査によって明らかにしました（図2）。その結果に基づいて、津波堆積物が分布する範囲まで浸水するような断層モデル（図3）をシミュレーションで構築しました。最終的なモデルは、幅100km、長さ200kmの断層が破壊したと推定しています。

今回の地震を起こした断層破壊域の幅、長さとも半分程度ですが、津波堆積物の分布域は実際の津波浸水域より小さいはずですので、実際の貞観地震を起こした断層面は、産総研が構築した貞観地震の断層モデル以上の規模を持っていたと考えられます。上記の調査及び

津波シミュレーションの詳細については、AFERCニュース, 2010年8月号に紹介しています。

<http://unit.aist.go.jp/actfault-eq/seika/h21seika/pdf/namegaya.pdf>